

なかま新聞

なかま新聞
編集 新聞部員
姫路市北条宮の町
215 番地
TEL079-287-1025



芭蕉に学ぶ旅と人生

～人生いくつになっても夢の途中～

松尾芭蕉は江戸時代前期に活躍した、何かと話題の多い俳人です。伊賀忍者で有名な伊賀国出身で、生家が百姓であつたにもかかわらず姓を名乗ることを許されていたため、『芭蕉Ⅱ忍者』説が根強く残っています。また45歳の芭蕉による『おくのほそ道』の日程と移動距離は一般人離れています。記録によると六百里(240km)を150日で移動しています。一日で50km以上も移動した日もあるのです。年齢的には壮年に差し掛かっていた芭蕉が、これほどの移動距離を一日で歩くのは無理が

あると考えられています。移動距離だけでなく、日程そのものにも自然な点が多数あるようです。芭蕉は幕府から密偵として「仙台藩への綿密な偵察」を命じられ、東北旅行を許されたのではないかという説もあります。

『おくのほそ道』の長旅から帰った芭蕉は、元禄2年12月から元禄4年9月までの長期間、大津に滞在しました。その時に詠んだ句に『行く春を 近江の人と 惜しみける』があります。当時の旅は現代とは違い、出発の時には死を覚悟して水盃をしたほどでした。久しぶりに江戸を離れて訪れた近江の門人の人々と歓談し、やがて別れの時が近づきます。また生きて逢えるかどうかもわからない浮世の身にとっては一期一会。琵琶湖に船を浮かべて遊び、やがて湖水朦朧として霞む景色の中で「行く春を近江の人と惜し」んだのです。

芭蕉の最後の句となったのは『旅に病んで 夢は枯野を かけめぐる』です。「旅先で病にかかり病床で見る夢は、自分が冬の木々の枯れきった野をかけめぐる夢ばかりだ」という

意味です。元気になって好きな旅を続け、もつと素晴らしい句を作りたいという願いや執念を感じます。旅を人生に置き換えると、現代に通じるところがあります。私もパーキンソン病をかかえながらも、人生という旅をまだまだ続けたいと思います。色々な所へ出掛け、様々な人と出会い、新しい体験をしたい。そのためには、今の体力を維持することと、好奇心を失わず新しい事に挑戦する気力を持ち続けることが必要です。そして何より、一緒に頑張り、励ましあえる『なかま』を大切にしたいと思います。

長谷川 和宏



珍しい彼岸花(円照寺にて) 岩村和雄

ティータイム



先日あけびで、秋の思い出はと聞かれて、私は「松茸」と答えた。その思い出は、私の母親の里での事である。今からだと75年前、秋祭りに行つての出来事。私より1歳年下の従弟と山登りでもしようかと出掛ける。山道を歩き回っているうちに道に迷つてしまい、高い所上がったも村の家並みが見えない。これは大変だと二人が慌ててウロウロしている時、ふと足元を見ると茸の様なものが生えている。それは向こうのアカマツの大きな木の根元まで連なっている。ひよつとすると松茸じゃないかと。しばし呆然と眺めていたが、持っていたドンゴロスの袋に松茸を詰め込んで帰りを急ぐが方角が掴めない。やっとこさで家にとどり着くと家では二人の帰りが遅いので心配していたが、松茸をドサツと袋から出したものだから、当時としても大騒ぎだ。皆から何処にこんな沢山の松茸があつたのかと聞かれるが、道に迷つた二人には説明ができません。顔を見合わせて苦笑していた。

「松茸」と聞くと、この時の光景が思い出され、今年の夏もその従弟と出会うことがあり、またこの話で盛り上がったのだった。

岩村 和雄

仲間の声

食欲の秋

岡野 悦子

一般に秋は「食欲の秋」と言うことが多いと思います。特に果物などが多いですね。

しかし、わが家では「嫁に喰わずな秋なすび」と言われるように、自家製の新鮮ななすびを採ってきて、色んな料理でわいわい言いながら食べています。なすの田楽、テンプラなど特に人気があるようです。

月見団子

福永 正世

急に「観月会に行つて来るわ」と、家族は出掛けて、孫よりメールでお月様の写真が届いた。そこ



絵：岩村和雄

で「ああ、今夜は十五夜だった」と気付いた。何も用意していないが、何かを作ろう、月見団子。白玉粉で小さな小さな団子に黄な粉を掛けただけのシンプルなものをごしらえた。

帰ってきた孫は、お団子を見て「わあー、白玉団子や！、お肉も好きだけど白玉団子はもっと好き」と満面の笑顔。「私も作りたい、教えて」と、嬉しい夜でした。

お祭り大好き

西本 洋子

私にとって「秋といえれば？」「ずばり「祭り」です。夜になると玄関先につるした提灯に灯りがともります。太鼓の音を合図に、いよいよ各町から、提灯を持った若い衆が、掛け声とともに町内を練り、宮へと行きます。

私はそれを見ると、男に産まれたかったと思えます。それ程、お祭りが大好きです。

秋祭り

金澤 清治

先日、引きこもりがちの私宅にも秋祭りのチラシが配られてきました。



絵：寺下典子

「今は何もしたくない。」「でも老い先を思うとそら恐ろしい。」「ここ数年そんな毎日でした。」

が、この度、あけびへ通い出し、なかま新聞への投稿依頼を受け、それではと欲張らずゆっくりと、秋祭りの屋台御輿についてでも書いてみようと思ひ立ち、そこで浮かんだのが、あけびでの火曜日二校時の脳トレ講座で貰った「難解漢字語句」のプリントでした。これをまねて屋台の部所の上部分を、先のチラシから拾い出してみました。

擬宝珠(ぎぼし)、露盤(ろぼん)、紋章(もんしょう)、総才端(そうさいばな)、伊達綱(だてづな)、高欄掛(こうらんがけ)、等々まだまだ沢山ありますが、これで十分練り子たちの話しが解かるというものです。私は約振りかえってみますと、私は約

五十年もの間、屋台の基本的な用語の読みも知らず、敢て覚えようとせざ、只々祭りに参加していたのでした。

ですが、今年見る屋台は、私にとって少し深く美しく見られる秋祭りになるだろうと楽しみにしているのです。

秋の想い

小村 明美

秋といえれば？「虫」。どうしても思い出す、母の元気な頃の句があります。「硝子戸を迷へる蛾にも愛の手を、のべていたわる人となりたし」

母の思いやりの心を今の私のもとさせてもらい、不自由さに苦しむ主人に、手をのべていたわる人とならねば・・・と、しっかり心に命じている、私の今年の秋です。

顔ひかり 声弾ませ

妻はめる

いつもとちがう 利用者さん

福丸 孝宗

(※利用者は大河万海さん)